

木村陽二郎*: ヒメオトギリの基準標本

Yojiro KIMURA*: The type specimen of
Hypericum japonicum Thunberg

日本のオトギリソウ科植物 Hypericaceae のモノグラフを書いた私は、かねてからヒメオトギリの基準標本を見たいと思っていた。1971年パリでの国際科学史会議に出席する機会に、スエーデンのウプサラ大学植物学教室にたちよって、当然そこにあると思われる基準標本を探した。Thunberg の *Flora Iaponica* (1784) にはオトギリソウ属に *Hypericum patulum* (キンシバイ), *H. japonicum* (ヒメオトギリ), *H. erectum* (オトギリソウ), *H. monogynum* (ビヨウヤナギ) の4種が記述されている。それら Thunberg のとった標本は一括してウプサラ大学の標本箱に大切に収まってあるはずだが、探すヒメオトギリの標本のみは見あたらなかつたし、ウプサラ大学の教室の人も知らなかつた。

1978年8月25日から27日まで Linnaeus (1707-1778) 200年, Thunberg (1743-1828) 150年, Fries (1794-1878) 100年を記念してウプサラ大学で O. Hedberg 教授の主宰のもとに記念式と共に「植物学者としての寄生生物」Parasites as plant taxonomist と題する国際的なシンポジウムがあつた。この式典に講演しシンポジウムに参加するに先立ち、ストックホルムの国立自然誌博物館植物部 Naturhistoriska Riksmuseet, Sektionen för Botanik を訪れた。ここでは日本の Thunberg 来日200年祭で知りあつた B. Nordenstam 博士をはじめ植物部長の R. Santesson 教授らに暖く迎えられた。Thunberg の基準標本もあるかと基準標本のみを特に分けて大切に収蔵してある臘葉箱を開いて *Hypericum* の標本をみせてもらつたが、ヒメオトギリの基準標本はなかつた。あきらめたが、ついでに一般閲覧用のなかのオトギリソウ属植物標本を出してみせてもらつた。そしてこのなかにヒメオトギリの基準標本を見出したときには全くうれしかつた。Thunberg の *Flora Iaponica* のなかには *Hypericum* としてはただ一つ *H. japonicum* の図があるが、この図が私の頭のなかにこびりついていたことが幸して、一目見たとき、これこそ基準標本だとわかつたのであった。早速 Nordenstam 博士にこれを告げるとすぐに *Flora Iaponica* を持ってきてくれて、二人でそれと合せみたが図と標本とはそっくりで疑う余地はなかつた。彼は大いに喜んでさすが専門家だと賞めてくれた。もちろんそのときからただちにその標本は一般閲覧の標本箱からとり出されて、基準標本の箱へと移された。Nordenstam 博士は私が帰国した後にその標本の写真をとつて送つて下さつた。

* 中央大学法学部自然科学研究室 Chuo University, 742-1 Higashinakano, Hachioji-shi, Tokyo 192-03.

Nordenstam 博士によれば 標本の裏に書かれた *Hyp. japon.* は Thunberg の手記であり (Fig. 3), また標本の表の右手の下に “*Hypericum*” また “*japonicum* Thunb” とあるのは Wikström の筆である。この *japonicum* の字は Swartz が鉛筆書きにしていたものを、よくやる ように Wikström がインクでたどったと思われると Nordenstam 博士はいう。

私はかつて「おとぎりさう科」(1951) のヒメオトギリ *Sarothra japonica* の記事に次のように書いた。

「本種は *Hypericum japonicum* Thunberg として日本の植物により記載されたが、Thunberg 氏の記載と共に出了挿図のため次の（私の記述する）コケオトギリと混乱した。然し記載には苞は披針形があるので、コケオトギリでなくヒメオトギリなる事は確かである。思うに Thunberg 氏はヒメオトギリとコケオトギリとを、種を区別せず一つのものとしたのであろう。そして記載はヒメオトギリで書き、図はコケオトギリを画いたのであろう。現在も牧野博士は両者を同一種として扱われ品種として区別せられているのである。」

この文で「Thunberg 氏がヒメオトギリとコケオトギリとを種を区別せず」と書いたが、これは誤解を生じやすい。

Thunberg はもちろんコケオトギリを見たわけではない。Thunberg の Flora Iaponica の図では苞が幅広く書いてあり、この点でコケオトギリとみられやすい。しかし今回、基準標本を見ると、それは同じシートに貼ってある他の個体ほどではないが、やはり苞は披針形であり、コケオトギリではなくヒメオトギリである。Thunberg の記述には「苞は披針形、先端は尖る」と書いて「葉は倒卵形、鈍頭」というのと全く異っていてはっきりとヒメオトギリの特徴をとらえている。それで図は苞が丸く書か

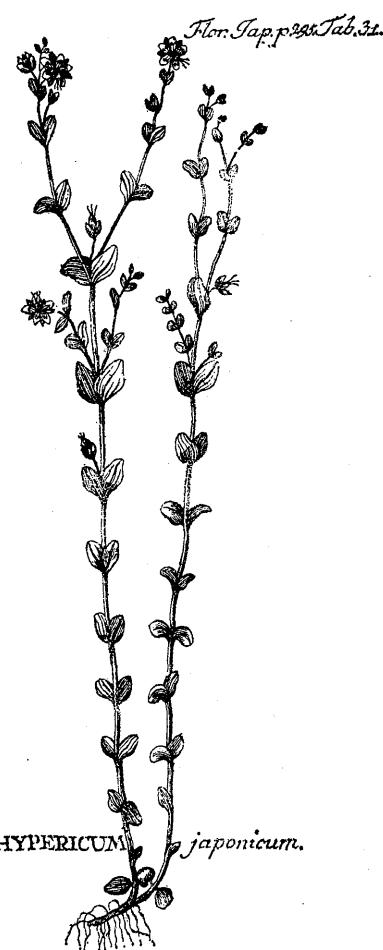


Fig. 1. ヒメオトギリ *Hypericum japonicum* の図 (Thunberg: Flora Iaponica)

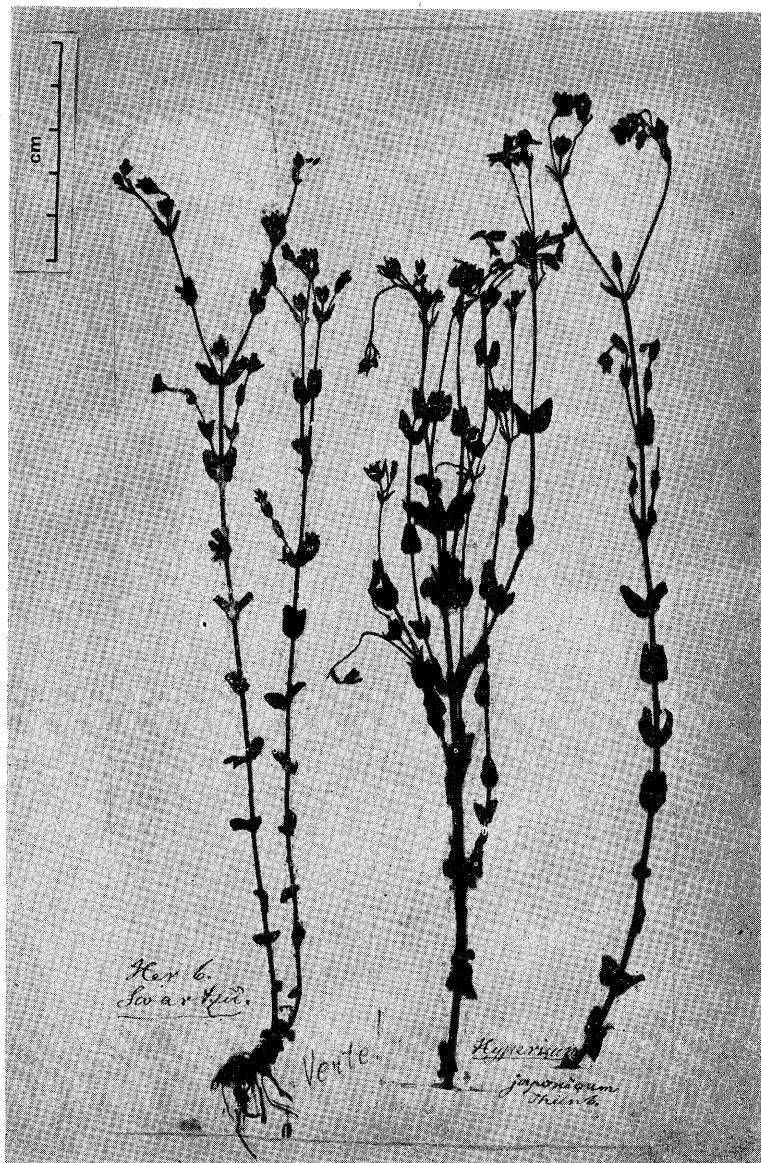


Fig. 2. *H. japonicum* Thunb. の基準標本 (Swedish Museum of Natural History 収藏。
Nordenstam 博士撮影)

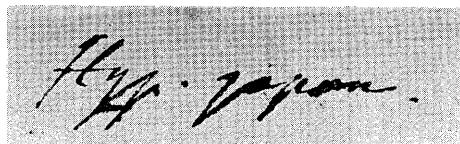


Fig. 3. 基準標本台紙裏の Thunberg の手記. *Hyp. japon.* と書かれている。
(Nordenstam 博士撮影)

れすぎているが、図も記述もヒメオトギリである。

ヒメオトギリとコケオトギリとは同一種とする人がある。それは私のモノグラフを書く前にその意見があるばかりでなく、最近活躍しておられるオトギリソウ科の専門家、大英博物館の N. K. B. Robson 博士もこれを同一種とみる。種はその範囲を大きくも小さく採ることも、極端でなければよいとか悪いとか言えない、というのが私の持論である。ただ同属植物を扱う場合に、ある種は小さくとり他の種は大きくとるというのであってはならないので、統一がなくてはならない。それで私のモノグラフで取扱った程度に種の大きさをとると、当然、ヒメオトギリとコケオトギリとは種を分けることとなる。私はオトギリソウ属植物で、今だに種を分けるのに苦労することがあるが、ヒメオトギリかコケオトギリかと迷ったことはない。その分布範囲も異なる。雑種と思われるのもみたことがない。

分類単位 (taxon) を大きくとるか、小さくとるかといわれるとどこに基準をおくべきかがはっきりしないので、人を説得できるほどの確信が今だに持てない。私はヒメオトギリやコケオトギリは *Sarothra* という属に属すと思うので、ヒメオトギリは *Sarothra japonica* (Thunb.) Y. Kimura でコケオトギリは *S. laxa* (Blume) Y. Kimura とする。それは花の構造が、一般のオトギリソウ属 *Hypericum* とは全く異なることが明らかだからである。しかしこの学名を使った人は非常に少ない。北村四郎博士は「原色日本植物図鑑」草本編II (1968) でこれを採用された。私がモノグラフで示したように、花式図を出されているので属の違うことをはっきりと知られたことと思う。「週刊朝日百科、世界の植物」では編集者の方針もあって *Sarothra* でなく *Hypericum* を私も用いているが、これは私が *Sarothra* という属名をやめたわけではない。その書が学名を大きくとるからその調和の上でのことである。属についてもこのように種と同様な問題が存在する。

Résumé

The type specimen of *Hypericum japonicum* Thunberg had not been known, till I found it among the specimens of the Herbarium of the Swedish Museum of Natural History, Stockholm on 25th August 1978 (Fig. 2). I distinguished

the species *Sarothra laxa* (Blume) Y. Kimura from the species, *Sarothra japonica* (Thunb.) Y. Kimura, in my monograph "Hypericaceae" (1951). One can easily distinguish these two species by its character of the bracts: lanceolate in *S. japonica* and ovate in *S. laxa*. The figure of *Hypericum japonicum* drawn in Thunberg's Flora Iaponica (Fig. 1) leads to error in judgment by its ovate bracts which somewhat resembles those of *Hypericum laxum*. But the type specimen of *Hypericum japonicum* shows us lanceolate bracts as those described by Thunberg.

□Thomson, John W.: **Lichens of the Alaskan Arctic Slope.** xii+314 pp. 1979. Univ. of Toronto Press, Toronto. US \$ 35. アラスカの北斜面の Arctic Coast と呼ばれる地域で、著者自身および Dr. A. J. Sharp ほか数名の苔地衣学者が、1958-74年に採集した地衣 504種が報告されている。属ごとに種の検索表が添えてあり、マニュアル方式で各種の記載文と分布が示されている。どちらかといえば伝統的な属の概念が踏襲されているのは、著者の温厚な人柄を反映しているためであろうか。冒頭に4頁分の写真があって、この地域の植生が推察できるほかは、各種についての図や写真はない。しばしば引用される H. Krog 女史の The Macrolichens of Alaska (Norsk Polarinst. Skr., no. 144. 1968) と併せ見れば、アラスカの地衣類の全容がつかめる。

(黒川 道)

□Edie, H. H.: **Ferns of Hong Kong** 285 pp. 1978, Hong Kong Univ. Press. 45ホンコンドル(送料込み)。香港は日本から東南アジア各地へ旅行する人にとって入口のような所で、たくさんの人がこの地を通過してまず熱帯植物に接する。面積の割に種類の数が多いといわれ、特にシダ類が豊富であることから、熱帯のシダを勉強する適地だとされている。香港といえば Bentham の有名な「香港のフロラ」があるが、これは120年ほど前に出版されたもので、その後断片的な論文は別として、まとまったフロラ誌はできないようである。本書は著者が香港大学の学生にシダを講義した際のテキストを元にして作ったもので、専門の研究者にも初心者にも役立つようにできている。内容は、最初にシダ類概説があり、次に香港産シダ類176種の分類順の総目録、これには Holttum の分類系が採用されていて、香港関係の異名は出典まで掲げてある。次が本書の大部分のページを占める種類の解説で、分布やノート、それに部分図を主とした線画が付き、種の検索表も具わっている。最後に用語解説、中国名の表、索引がある。変A5の手ごろな判で、地図1、写真15、線画150がはいっていて楽しく、香港といわず熱帯・亜熱帯のシダに興味をもつ人にとって便利な書物である。

(伊藤 洋)